生協「が」から生協「も」へ 実行委員会型居場所「だんだんひろば」

カカ+カカ 同のある風景 267

東京保健生協

全国の医療福祉生協が運営している居場所は、毎年、150～200か所のペースで増えています。2018年3月末で1223か所に達しました。多くの居場所は、医療福祉生協単独もしくは地域購買生協などとの連携によって運営されています。今月ご紹介する「だんだんひろば」は、東京保健生協も含めた8団体が参加する実行委員会形式で運営している居場所です。

組合員「の」では広がらない

大塚診療所の3階空きスペースを活用した実行委員会型居場所「だんだんひろば」がスタートしたのは2017年10月のこと。診療所の前に石段があるので「だんだんひろば」と名づけられました。また「だんだん」には「徐々に」、「ありがとう（鳥取県、島根県、愛媛県あたりの方言）」の意味も込められています。

「だんだんひろば」の種がまかれたのは2003年に始まったワイワイ班です。ワイワイ班は、一人暮らしの方や高齢者夫婦の方を対象にし

た、月1回の食事会で、「食事会の日はデイサービスを休んでいます」「うちのおばあちゃんは、食事会にいくことを目標にリハビリに励んでいます」という声が聞かれるほど、参加者の心のよりどころとして根づいていました。

「月1回の食事会をさらに発展させていきたい」。そう考えていた大塚5・6支部の澄川洋子さんが間瀬恒子さんと出会ったのはちょうどそのころです。間瀬さんは、退職を機に認知症カフェやたまり場をお手伝いしたいと、あちこちを見て歩いていたところでした。澄川さんと間瀬さんはすぐ意気投合し、2016年11月に組合員が中心となって「なごみカフェ」をスタートさせ、間瀬さんが店長になりました。

澄川洋子さん(左端)

間瀬恒子さん(左から二人目)

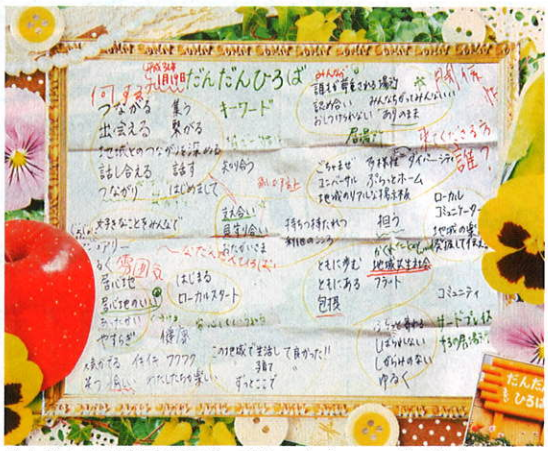
「高齢者の方がシルバーカーや車いすで喫茶店を利用するには、なかなかハードルが高いです。格安でコーヒーが飲めておしゃべりできる場所が近所にあれば、私自身の安心にもつながります。診療所の近くに住んでいるのは医療福祉生協の組合員だけではありません。まわりに住んでいる人たちも、気楽に立ち寄れる場所が欲しいと思っていました。医療福祉生協としての活動だけでは、どうしても『組合員の場所』となってしまいます。『誰でも来てください』と思っていても、まわりの人はそうは思いません。そんなところを何とかしたいと思っていました」と間瀬さん。そこで相談した先は文京区社会福祉協議会(以下、社協)でした。

つながる広がるネットワーク

「間瀬さんから社協の『ふれあい・いきいきサロン※』に登録できないかと相談をいただきました。サロンに登録すると運営補助費が出ますし、住民の方々にお知らせもできます」。と話すのは、社協の本多桜子さん。本多

本多桜子さん

※ ふれあい・いきいきサロン：地域の方たちが参加・運営し、定期的に集まることで顔なじみの輪を広げ、いきいきとした楽しい生活を送ることを目的とした「仲間づくり」「出会いの場づくり」「健康づくり」をするための場。全国の社会福祉協議会で設置が推奨されています。



だんだんひろば実行委員会で出されたキーワードの数々

さんは大塚地区を担当する地域福祉コーディネーターです。

医療福祉生協が運営する居場所を社協のサロンに登録している事例は珍しくありません。今回のお話が面白いのはここからです。サロン登録を機に生協とのつながりができた本多さんは、組合員ネットワークの素晴らしさを感じると同時に、ネットワークをさらに広げていくために、大塚診療所の3階で生協も参加する地域全体の居場所づくりができないかと考えました。社協のネットワークを駆使しつつ数か月の準備期間を経て、東京保健生協・NPO・町会・学生ボランティア・社協などが参加する「大塚診療所3階居場所づくりプロジェクト」（準備会）が開かれました。その後、数度のプロジェクトを経て、実行委員会型居場所「だんだんひろば」が2017年10月にオープンしました。

現在、実行委員会に参加する8団体が「だんだんひろば」を利用しています。毎週火曜日は「NPO法人とらいあんぐる」による貯筋体操、ほかにも名作オペラをDVD鑑賞する会や子育て世代のおしゃべり広場、社協なんでも相談会などに利用されています。

歩いてこられる小さい範囲

「コムコムの取材なんでしょ。特別にテーブルに飾るお花をたくさん持ってきたのよ」。今日は「だんだんひろば」を利用した「なごみカフェ」の日です。なごみカフェは毎週金曜日の10時から13時まで開店しており、子どもから高齢者まで気軽に立ち寄れる組合員が中心になって運営しているコミュニティカフェです。みなさんコーヒーなどを飲みながら楽しくおしゃべり。区内にある障害者支援施設でつくられたパンも販売されていて、昼食がてらに立ち寄る人もいます。月に1度は高齢者あんしん相談センター（地域包括支援センター）による相談会が開かれます。

澄川さんと間瀬さんは言います。「昔から診療所で班会をやってきて、この場所に思い入れがある人たち

がたくさん来られます。なによりもうれしいのは『私にも出かける場所がある』と言ってもらえることです。毎週カフェを開き続けるためには、スタッフは一人でも多い方が助かるので、組合員だけでなく近所の人にも手伝ってもらえるといいですね。ここの自慢はスタッフも参加者も、歩いてくることができる範囲に住んでいる人たちばかりだということ。住んでいる場所もだいたい分かります。地域に顔見知りが増えるきっかけにもなっています」。

町田直樹さん

「子どものころ、空き地に行ったら誰かいて、すぐ友達になれました。だんだんひろばが空き地みたいな場所になればいいですね。私はホスト、あなたはゲストという関係を超えたいです」

13時を過ぎると「今日の振り返り」をするなごみカフェスタッフの横で、部屋の模様替えをするのは「NPO法人とらいあんぐる」の町田直樹さん。13時でなごみカフェという場が終わってしまうのがもったいないので、そのまま引き継いで夕方までオープンスペースとして運営しています。その名も「なごみ+プラス」、NPOへのバトンタッチです。これが実行委員会型居場所「だんだんひろば」ならではの光景です。

施設の一部を貸し出すなど例は全国にたくさんあります。場所を貸し出す発想の行き着く先は、場所の管理です。「だんだんひろば」は、診療所の3階を利用する団体や個人がともにつくっていく場所です。生協「が」貸し出す場ではない、生協「も」運営に参加する場、それがだんだんひろば。生協「が」と生協「も」、このたった一文字の違いは想像以上に大きいようです。

文：江本 淳（会員支援部）
写真：大村洋介

元東京保健生協職員の飯田直彦さん（左）。「定年して10年たっても、こうやってかかわれるのが生協のいいところ。男性陣の役割は入り口近くのテーブルでコーヒーを飲むこと。見えるところに男性がいれば、ほかの男性もきっと入りやすいからね」

東京保健生協

- ●設立年月日　1961年12月1日
- ●組合員数　53,545人
- ●出資金　20億4,600万円
- ●支部・班数　45支部　433班
- ●事業所数　病院2　医科診療所10　歯科診療所5　介護関連21

※2018年3月1日現在